

バリアフリーニュース

(第3号)



＝ 木蓮（モクレン、白モクレン） ＝

つぼみの先が必ず北を向くので、方向を指示する植物「コンパス・フラワー」とも呼ばれている。

花言葉は「自然への愛」「持続性」

3.11 東日本大震災から3年となります。

みなさまのもとへバリアフリーニュース(第3号)をお届けします。

東日本大震災で被災した体験とバリアフリー

遠藤 邦弘さん(宮城リーダー)

東日本大震災の時に、障害を持った人たちに大きなバリアーが立ちはだかっ
たと聞いています。現在、私が勤めている「社会福祉法人 円 まどか」は、
仙台市若林区荒浜地区で海岸から内陸へ1.2Kmの地点にありました。荒浜
地区は壊滅し、「まどか荒浜」として平成16年4月設立し、和菓子や和紙細
工等の商品を作り、障害福祉サービス事業所を展開しておりました。私たちの
施設もこの大震災により、施設は全壊し車両や設備は全て流されました。

利用者46人のうち、当時施設で作業活動していた43人と職員12人は、

被災直後、2 km離れた「七郷中学校」へ全員無事避難し利用者は全員無事でした。しかし、避難後、施設に保護者への連絡先のメモを張りに戻った職員2人のうち1人が津波の犠牲となり亡くなりました。



このような大震災時の体験からバリアーの問題点を考えて見ようと思います。

- ①知的・精神障害者は、避難所で恐怖のあまり不安になり落ち着かない動き回る行動をとる。
- ②知的・精神障害者は、たくさんの情報を自分で処理できず、不安興奮行動になる。
- ③肢体不自由者は、健常者と同じように非難できない。
- ④聴覚障害・視覚障害者は、情報が入らず行動がとれない。停電によりラジオ、テレビが使えない。携帯が使えない。
- ⑤避難所では、トイレが狭く、段差があり車椅子の方は使いにくい。

など、挙げればきりが無い程のバリアーがありました。今回の大震災は、津波が被害を大きく拡大することになりました。

このような中、まどかの利用者43人、職員12人が運転する車で、中学校に避難しましたが、避難所から家族への連絡が全く取れず一晩共に過ごすことになりました。一部の利用者は不安で落ち着かず、体育館の中では「大声を上げる」「多動になり動き回る」などの行為のため、職員は車の中で「個別」に対応し、一晩を過ごしました。翌日に職員が車を分担し、家庭を探し回り一人ずつ送り届けることができました。なかには家族に会えることができず、職員の家で2～3日保護したケースもありました。

知的・精神障害者への対応は平日頃からの「馴染みの関係」が非常に重要であることが実証されたと思います。震災時に障害を持っている方が、安心して避難できる場所、居場所をどう確保するか。避難経路のバリアフリー化と情報提供の在り方等について考えることが私たちに課せられたテーマであると強く感じます。

フィンランドでの暮らしから学ぶ価値観

石井 敏 さん(宮城リーダー)

2012年5～12月まで8か月間、フィンランドのヘルシンキに滞在しておりました。大学の海外研修制度を使つての滞在でした。フィンランドのNPOや財団で運営されている高齢者住宅を束ねる高齢者福祉中央組合という組織で、客員研究員としてフィンランドの高齢者住宅の状況について研究してきました。研究内容や成果はまた別の機会に譲るとして、今回はフィンランドという国、その国の福祉について簡単にご紹介したいと思います。

実はフィンランドでの生活は2度目になります。1997年から2年半、大学院生時代に留学の経験があります。15年ぶりのフィンランドでの生活。さまざまな思いを胸に充実した時間を過ごしました。15年の時の経過の中で、変わることに、変わらないこと、変えてはいけないこと、そして、その国を成立させている背骨のような思想・真髄というか、彼らの価値観をあらためて肌で感じてきました。

北欧諸国の一つであるフィンランドは1917年に帝政ロシアから独立した若い国です。その後も独ソ戦争に巻き込まれて敗戦。ソ連への領土割譲と多額の賠償が経済的にも大きな負担となりながらも、賠償を完済し、1950年代に入り急速に産業化と経済的発展が進みました。1970年代に入ってOECD諸外国のGDPレベルに到達し、また同時期にようやく北欧型の社会保障システムを完成させました。1990年代にソ連崩壊によりもたらされた大恐慌により国内の経済はきわめて深刻な事態に陥るものの、福祉国家としての形は維持し続けます。経済発展と北欧型社会保障制度の確立を短期間のうちに成し遂げた点においては、スウェーデンなど他の北欧諸国とはその背景と状況が全く異なります。高齢化の進行なども遅く、まさにこれから数十年で一気に超高齢社会に向かおうとしている状況にあります。これから10年後には、日本と並ぶ超高齢社会国となると見込まれています。



【高齢者のダイアクティビティセンターで
過ごす地域の高齢者たち】



【在宅で一人暮らしをする高齢者と筆者
(訪問介護に同伴して)】

北欧型の社会保障システムを基盤とし、特に保健・医療、福祉や教育、子育て等の住民の暮らしに直接的に関わるサービスについては各基礎自治体の義務として整備・運用されます。他の北欧諸国と比べた際には、その歴史的背景、人種・言語的な背景、ソ連（ロシア）との関係などにおける相違が、この国の国民の精神性、暮らしの形や制度の形、建築やデザインのあり方にまで影響を及ぼしています。きわめてシンプルな制度設計とデザイン、国民・住民を信じる政治の姿勢（その逆もしかり）、その中にある高齢者や障がい者の暮らしとそれを支える住まい。

身体的な状況、経済的な状況にかかわらず、すべての国民が一定水準以上の暮らしを保障され、そのための住まいや施設が整備されています。国にとって、国民のために、住民のために「何を大切にすべきか」。その価値観が今の日本とは全く異なるような気がします。一人ひとりの暮らしを、それぞれに合う形でしっかり整え、支えるという確固たる信念と、温かいまなざしが政治にも、また国民一人ひとりにもあります。子供も大人も高齢者も、健常者も障がい者も、みんな平等な社会に生きています。そして将来に不安を感じることなく、安心して暮らしています。それが実感できる社会があります。

それらを保障するのが政治であり、その実現を支えているのが一人ひとりの国民が社会で共有する価値観です。何とも言えぬ脱力感と、憧れの想いを抱きながら、日本での実現に向けて、できることは何か、すべきことは何か、あらためて肌で感じて帰国しました。「行き着くところ教育である」、という信念も確信に近い思いとしてあります。一朝一夕では実現できないこの道。今できることを着実に歩いていくしかない、というのが自身で至った結論です。同じ価値観を共有できるような社会づくりに向けて「さらに励みたい…、励まねば…」、そういう想いにさせられたフィンランドでの滞在でした。

「福祉の寅さんをめざして」

菅原 進 さん(岩手リーダー)



私が岩手県社会福祉協議会（以下、県社協）に勤務することになったのは、生命保険会社に盛岡支社長として勤務していた時、バブルが弾け、会社が破綻。先の見えない中で、破綻のニュースを見た県社協のTさんから「大丈夫ですか。あなたの今後の仕事について困っていることがあれば、いつでも来てください」との電話を貰ったことがきっかけです。その時は涙の出る思いでした。

その後、半年間は個人契約者へ契約保全連絡と200名以上いた職員の処遇フォローに全力を注ぎ、一段落ついた頃、不思議な開放感と同時に、無力感にさいなまれました。自分の居場所を失いかけていた時、Tさんからの電話を思い出しました。連絡をしてみると「何時でも待っているから」との返事。「数字の世界」から「心の世界」に生きてみようと決心しました。

その際、どうせなら「福祉の寅さん」になって、多くの人がこの地域に住んでよかったと喜びや満足感を味わえる様な地域づくりの一端を担いたい、そして他人に優しく、思いやりのある人に近づくための一助になればと思い入職して、今年で14年目になりました。基本的に人に頼まれた事は断らず、自分で出来ない事は、出来る人に繋げ解決するようにしています。

最近講演で必ず話していることですが、3感を心掛けています。3感とはまず、「感心」何事にも関心を持つ心、より新しい世界が開き好奇心が高まります。2つ目は「感動」感動する心を持つ、無感動な日々からは何も学べません。イキイキとします。3つ目は「感謝」感謝の気持ちを持つ。不満がなくなり、心が豊かになります。この3感王になるには常に素直な心で居ることが大切と考えています。

ハード面では10年前と比較すると新規の構造物や道路整備等において、バリアフリー化がかなりのスピードで進んできています。ソフト面では、震災以降

「絆」のスローガンのもと、私たちの心に助け合い、支え合いの精神がより根付いてきているように感じます。

そのような中でも、我々年配者が若い世代に伝えなければならないことがまだ多くある様な気がします。バブル経済の頃仕事に追われ、家庭を顧みず、子供への教育、部下への指導をきちんと果たしてきたのか、そんな反省をしながら、座右の銘「人の話に捨てるものは無い」「努力によって人に劣る心配無し」を心がけ、現在64歳残りの人生を少しでも福祉、人、物の為になることを探して生きることができればと考えています。

(編集後記)

去る2/21(金)、福島市に於いてバリアフリーリーダー連絡会議にご出席いただきありがとうございます。

また、今回都合で出席できなかった方々は、次回開催の際、日程調整をさせていただきながら、皆さんがご出席いただけるようにと想っております。

今後とも、皆様とともにバリアフリーを推進することを目的にバリアフリーニュースを発行して参ります。

(問い合わせ先)

東北運輸局交通環境部消費者行政・情報課
〒983-8537

仙台市宮城野区鉄砲部町1番地

TEL:022-791-7513

FAX:022-791-7539

E-mail:tohoku-syougyouka@tth.mlit.go.jp



= チューリップ =

花言葉は「博愛」「思いやり」「名声」「恋の宣言」